

■これからのロータリー活動

PG 齊藤 博様(市原ロータリークラブ)



本日は横浜南ロータリークラブ例会の卓話にお招きいただきまして、有り難う御座いました。誠に栄光に存じます。前回お伺い致しましたのが三年前の2000年2月19日、今回は『これからのロータリー活動』と題してお話しさせて戴きます。

1. 始めに

この問題を考えます時第一には、ロータリーとは何かを明らかにする事。第二には、現代社会のニーズの元で、一体何を求められているかに就いて考えて見ることだろうと思います。

で最初にロータリーのルーツを訪ねて、そして思想としてのロータリーについて申し述べ、21世紀のロータリー活動は如何にあるべきかについて、触れてみたいと存じます。

今21世紀を迎えて、ロータリーは今後どうなるのか、発展して行くのか衰退して行くのか、楽観論と悲観論が私達の回りに蠢いております。楽観論は単純であります。4人が始めたことが、今124万人もの人々の共感を得て居る。それは心と心が通い合う共同社会では、ロータリーは極めて大きい役割を果たして居るからだ。100年になんなんとする組織は、そう簡単には崩れるものではない。巨大な組織は益々大きくなるだろうと言うのであります。

これに対して悲観論は深刻であります。此の二、三年クラブの数は増えているのに、会員数は減少して居る。こういう現状をどう見たら良いのか。どうも不景気のせいだけではなさそうだ。組織は上位下達(かたつ)の傾向が高まって来て居る。各地で会

員増強はままならない。草の根会員と国際ロータリーとの解離だと、ラビッツア前会長は言う。心を失ったロータリーには、もう魅力がないと、クラブを去って行くベテランロータリアンもおられます。ロータリーは21世紀になって果たして栄えて行くのか、そんな悲観論がございます。世界のロータリーはどう変わって行くのか、其を知る為にはどうしても歴史を学ばなければなりません。歴史を二つの全く違った歴史に分けて見ますと、一つは外史、頼山陽の日本外史がそうです。桓武平氏、清和源氏から徳川に至る権力闘争の流れと代表的武家についてその沿革を記したものです。此のような形の上で現れて来るもの、現象の歴史を現象史、これを外史と申します。これは連続の連続であり、時の流れと共に変わって行くのです。今一つは内史。内史と言うのは精神史です。人間の魂の歴史、般若心経などは精神の歴史の中の一齣です。般若心経、バイブルの文言を変えることが出来ないと同様に、精神史は変えることが出来ないんです。最も優秀な内史の原理の宣言と言うもの、人間が一度認識せられた高次元の表現は、人間が存続する限り消すことが出来ない。規則改正の対象にならないのでございます。処が内史即ち精神史は、優れた少数の人だけがそれを認識して、其の人の影響力の範囲内において全人類を潤すのですが、その人がいなくなったり、世の流行により其の提唱が余り影響を受けないような場合になりますと、優秀なものがパッと消えてしまうんです。消えたから精神史の認識は減んだかと申しますとそうではない。それをreviveする因縁がパッと出ますと、優秀な原理が再び生き返って姿を現す。これは本質の認識を中核体とする、断絶の連続です。イギリス法制学会の権威者でありましたフレデリック・ウィリアム・メイトランド教授が『我々が歴史を学ぶと言うことは、単に過去を追憶する為のものではない。歴史を学ぶことによって、初めて正しく現在を認識し生きることが出来る。そして過去現在の正しい認識を踏まえて、初めて未来を展望することが出来る。従って歴史を学ばないものには、現在も未来も語る資格がない』と言い切ったと申しますが、これは内史、精神史を指しております。其の意味でもロータリーは、たかだか98年位なのですが、やはり20世紀初頭に生きた人達の知恵を学ぶとい

うことは、大変大事な事であります。ロータリーは昔隆々として栄えた。其の時にやってきた事をもう一度やり直そう。そうすればロータリーは昔の繁栄を取り戻すことが出来る。となれば必然的に歴史に学ぼう、昔の人の知恵に学ぼうと言うことになるのであります。ロータリーと言うのは思想なのであります。思想は絵に描けない頭の体操なんです。頭の体操なんだけど心の中に宿り、その宿ったものが宿った体を使って、周りの人達に理想へ理想へと導いて行くエネルギーになるのであります。思想はロータリアンの魂の中に宿る。その魂を宿らせる場を提供する上物のことを、ロータリー・クラブと申します。

2. ロータリー発生史

叔、そのロータリーの誕生は、1905年2月23日にもたれた四人の会合であったとされておりますが、しかしそれ以前、即ちポール・ハリスが育てられた環境から、その考え方が自然に生まれて来たもの様で御座います。彼の著者『我がロータリーへの道 My Road to Rotary』に『ロータリーは故郷の谷間で産声を上げた。私の少年時代のニュー・イングランドの人々の特性であった寛容と善意と奉仕の精神から生まれたものであり、私はその精神の自分の中にあるものを、総て自分なりに伝えようとして来た』とありまして、祖父母に育てられている間にロータリーの基本になる考え方が形作られたものようであります。そしてその後の発展は、形の整理に過ぎないと考えられます。ニュー・イングランドは17世紀イギリスから渡って来た清教徒ピューリタンによって開かれた土地で御座います。

さて、このピューリタンの思想とは何か。これを明らかにしようと思うとき、時代は16世紀の始めに溯る。1517年、日本で申せば室町時代、宗教改革の火蓋を切ったのはマルチン・ルターですが、少し遅れて1532年スイスのジュネーブで、ジャン・カルヴィンが、同じく宗教改革の狼煙を挙げました。『聖書を読み一人一人が直接神を心の中に取り込んで、出来るだけ努力しなさい。努力が至らないときは祈れば良いじゃないか。祈れば必ず神の心が乗り移って、貴方はだんだんと良い人間に成長するであろう』と説きました。そして『総ての人は聖俗の別なく、自分の職業を神からの思し召しと心得て、諸々の欲求雑念を断ち切って、己の仕事に専念

しなさい』と自己抑制の必要を説いたのでございます。これによって人々は、世俗の職業活動に勤む勤勉で禁欲な近代市民となり、経済的繁栄を齎して、近代資本性社会形成の力となりました。

ロータリーに独自の奉仕の実践類型パターン(一般様式)と言うものは、職業的社会生活における制度の改革の事を申します。この社会改良のエネルギーは、例会での同業者を交えない純粋親睦から生まれます。これが社会制度としてのロータリー運動の独自性であります。この考え方は、どうもカルヴィンから来ているんじゃないか。彼はビジネスと言うものを、中世の社会体制・荘園制度の中で考えた。『宗教家、学者、法律家は地位が高い者、ビジネスは卑しいもの、いやそうじゃないよ、職業はいずれも神様の思し召しによってあるもので、自分の心の自覚の問題である。職業と言う現象に振り回されなくて、その背景にある本質で捕らえるならば、そこに貴賤の別はないのだ』と説きました。厳しい宗教運動の中であって、心を磨くときは聖書を読み教会に行く。ロータリーに置き換えれば、教会に当たるものは例会であり、聖書はロータリアンでありまして、こういう形で自己研鑽の精神的エネルギーを作り出しているの御座います。これらの考え方からロータリーは、その後裔だなーと思われる節もないわけではないので御座います。

今一つカルヴィンは、政治権力の中で権力者が神に従わないときは、例えそれが如何に強大な主であっても、人民は、彼への服従の義務から解放される事を説きました。

この考え方が二つに割れます。一つはプロテスタンティズムProtestantism、これはスイス、オランダ、フランス、ベルギーに広がりまして、カソリックの勢力と衝突して血塗られた宗教戦争を経て、その荒廃の中から17世紀半ばに、近代国民国家と言う制度が生まれました。南ヨーロッパでは新教プロテスタントの勃興に刺激されて、カソリックの勢力が著しく挽回されまして、スペインのフランシスコ・ザビエル等は、ジェスイット教団を作って、海外の布教に乗り出します。万里の波濤を乗り越えて、インド中国にも伝導し、日本には天文(もん)18年(1549年)鹿兒島に上陸、以来島原の乱まで凡そ90年間、あの痛ましい殉教の歴史が繰り返されたので御座います。

今一つはピューリタン、これはイギリスに広がり、信仰者を集めてイングランドに土着する。そして宗教的絶対正義感の中で、勤勉・禁欲を旨とし正しく生きようとした。これが清教徒気質（カタギ）であります。

1642年、ピューリタン革命がイギリスで起こりました。スチュアート王朝、国王がカトリック信仰とフランスの絶対君主に傾倒し、議会を無視したので、議会派と国王が正面衝突した。国王軍を破った議会派の制裁によって、1649年1月国王チャールズ一世は断頭台の露と消える。王政をやめて共和政とし、11年間独裁政治を行いました。其のときの議会派のリーダーが、オリバー・クロムウェル。1658年彼がこの世を去りますと、その後1660年、チャールズ二世が即位して王政復古となり、清教徒を抑圧し、その非寛容的な態度に絶望したピューリタン一派の人達は、信仰の自由を求めて北米に逃れます。ニュー・イングランドを開拓し、この新大陸に清教徒の基礎を置いた。これがアメリカのプロテスタント教会の母胎となったと言われております。ヴァーモント州と言うのはニュー・イングランドの一つでありまして、このウォリングフォードと言う田舎町に住んでおりましたのがハワード・ハリス、ポール・ハリスの祖父は、ピューリタンの出身であったので御座います。このようにしてポール・ハリスが生まれたとき、彼の心の中にピューリタンの精神が宿っていた。そして成長するに伴って、祖父ハワード・ハリスからそういう種類のピューリタニズムを学んだらうと思います。ポール・ハリスは晩年『若いころは色々考えて来たけれど、世の中と言うものはそう理論だけで成り立っているものではない。大切なことは人間は先ず正直でなければならない。勤勉で人のことは思いやらなければならない。こういう何処にもあるような素朴な概念が、実は人生の考え方の中に必要な事だと分かった。この基本的な要素を私に与えてくれたのが、ニュー・イングランドの祖父の培っていた家風なのだ』と申しております。そして晩年に、職業奉仕の原型になります思考をロータリーの中に取り入れました。もしこれがなければ、1927年の職業奉仕の概念は生まれて来なかった。またポール・ハリスは、『ロータリーは決して宗教でもなければ、その代用物でもない。それは古くから

存在する道德概念の、現代生活における実践に他ならない』(ロータリーの理想と友愛 p159)と述べておりまして、戒律をなくして在家の形でやろうとすると、それは倫理であります。ロータリーには戒律は御座いませんが、宗教と同一のものを復元することが出来るので御座います。

3. ロータリー哲学

さて、1905年に誕生したロータリーは、その後フレデリック・シェルドンや、ガイ・ガンディカーその他の俊才が輩出しまして1908年より22年にかけて、原理の開発が行われました。思想としてのロータリー、その源流になるものはフレデリック・シェルドンでありまして、ロータリー運動と言うものを集約して、最も単一化された形でロータリー哲学理論を自覚した最初の偉大な先達であります。で、20世紀の始めに提唱されたシェルドンの論文を見まして、何か奥の院の宝物にぶつかったような気が致します。

シェルドンの考え方を標語で表したのがHe Profits Most Who Serves Best. でございます。『儲ける為には奉仕しろ』とか『奉仕に徹すれば、よく報いられる』と言う意味ではなくて『儲けの背後に尊敬と信頼と言うものが交換されなければならない。ひたすら利己と利他との調和の世界の実現を願って、自分の職業を律する者には恒久的信用を得て、清浄な金が最も多く帰属する』と言う事を意味するのであります。しかし実際には、ロータリーは何処へ行くのかと思うとき、この理論を見返すことは大変意味のある事だと思っております。

聴くところによりますと、先の規定審議会の678号議案により冒頭のHeをThe Oneに変えるということですが、これはシェルドンの著作になるものでありまして、この標語の表現を本人以外の方が勝手に修正することは、大変失礼に当たる、許されぬものと考えます。

ロータリー運動と申しますものは、倫理運動であります。倫理的な人間を造って行く。愛の心を持って人を育てる。人を育てるところにロータリーの本願がある分けです。今日ロータリーが倫理運動であるが故に、正に素晴らしい巨大な組織に発展して参りました。ロータリーを始祖とするアメリカ奉仕クラブの中で、思想まで把握したのはロータリーだ

けでございます。この純度の高いものは時代を超越し、場所を超越する。イエスキリストの行状をお書きになったバイブルの原則は、二千年になんなんとする。仏教も又然り。この間、社会は無限に変わった。にも拘わらず今日なお、我々の心の支えになっております。世の中は変わる。むろん時代の流れに沿ってロータリーも変わらなければならない。何時迄も23-34号の世界ではないよと言う議論もありますが、変わるのは現象でありまして、変わらなければならないロータリーの背景に、変えてはならない万古不易なロータリーの核、原点があると言うことを、十分に理解し忘れてはならないと思います。そのエネルギー源(ゲン)を作り上げるべきものが、ロータリー・クラブの本質であり、社会的意味であります。もしロータリー運動が社会的本質を見落とし、原理を離れて本質が変わって参りますと、それはそんなに価値のある運動ではなくなって参ります。

4. ロータリー再興への道

今ロータリーの悲観論が蠢いております。

ロータリーは会員一人一人が、他人に尽くすと言うことを信条とする所謂奉仕の精神と、一方この団体特有の友情という暖かい精神の二つの柱が、今日までロータリーを支えて来た、大きな基本理念だったと言えます。

しかし同じようなことを目指す所謂奉仕団体は、この世の中には他にもいくらでもあります。この中であって、時にロータリーが90年の長きに堪えて発展して来た秘密は、会員一人一人の奉仕の実践という特徴もさることながら、私はロータリーの規則と組織の厳しさにあったと思います。出席の厳しさ、職業分類による一業一会員制の原則、至れり尽くせりのロータリー情報、役職の1年交替制などに見られる厳しさです。処が最近、これは団体発展のための宿命でもありましようが、やたらに会員増強に狂奔するあまり、ロータリー本来の奉仕は如何にあるべきかという議論よりも、会員を増やす為には、どの規則をどう緩めるべきか、などという議論のみが先走り、これらの厳しさの特徴がすべてにわたって乱れて来たのは、いくら時代に即応するためとはいえ、ロータリーはこれで良いのかと思わざるを得ません。ロータリアンがロータリーの基本的ルールを守らないところに衰退の元があるように思います。

そこでロータリーを高める道は二つあると思います。一つは、ロータリーの本質にある制度を再確認し、それを確立することです。即ち一業一会員制、例会出席であります。この二つはロータリーの核になる原則で、この二つのどちらかでも欠けたなら、それはもうロータリーとは言えなくなります。

1959年国際ロータリーの会長を務めたハロルド・トーマスが『ロータリー・モザイク』と言う本を書きました。モザイクとはガラス破片であります。モザイク模様と言いますが、恰(あたか)もロータリーは思想の世界であります。色んな思想がお互いに他人を排斥する事なく、他の人から謙虚に学ぶ姿勢をもって、沢山の思想を正にモザイク模様の如く散りばめられている。そういうことを万感の思いを込めてつけた題名が『ロータリー・モザイク』であります。ロータリー文庫から訳本を出版しましたところ、6400部完売致しました。そのハロルド・トーマスが1970年代の章の冒頭に『我々多くの者は憂慮に耐えないのであるが、ロータリーがその上に樹立されて今日の力と安定にまで築き上げられたその基本的特質の二つが、次第に希薄に、さらにより希薄にされる方向に向かう傾向がある。この二つとは、会員制度における職業分類の原則と、もう一つは例会への規則的出席である』(p319)と記しました。現今、正に1970年代に予測していた様に、その原則が守られなくなった。いま正に大事な局面であります。精神の問題というのは、必要性があるときだけ現れる。終わったら消えてしまいます。絶えず心の中に宿るように努力していないと、これは持続することが出来ないのです。見えない連続、こういうのをcon-tin-u-um感覚の連続体と申します。

前回の規定審議会で例えば、職業分類の不当な操作でこういう種類のもの、一業一会員制からする例会出席などは皆葬られてしまいましたが、其の前の、良質な本質的なものは、些かも損傷を受けていない。ただ中断が起こっているに過ぎない。何時か再生されるべき中断であって、永遠に葬られるべき中断では無いと考えれば良いわけです。

今会員の減少が憂慮されておりますが、なぜ人はロータリーを退会するのでしょうか。魅力が薄れて来たからだと思います。資本性経済社会は自由

競争です。自由競争社会では同業者の関係は食うか食われるかの関係にあります。自由競争があると人は心を開かない。そこで知恵者が考えて、一つの職種から一人だけ取ろうと言うことで来ました。油断はしないぞ。顔で笑っていても、腹の中ではあいつは俺の同業者でと、心は開けない。それが今度、規定審議会148号議案によってクラブ会員数50人を基準にして、一業五会員制を採るという。これが21世紀のロータリーの始まりに確立された結論であります。これは国際ロータリー理事会の提案ですが、こういう事で果たして21世紀に正しいロータリー運動が展開出来るのか。企業が傾き、会費が払えないという問題もありますが、これではクラブの親睦は潰れ、活気は無くなるし、魅力も損なわれて参ります。ポール・ハリスがつくったロータリー運動の核の一角が、崩壊したと認めざるを得ません。また日常の管理に関する事柄に追われ、心に楔を打つような、文化的な刺激が殆ど無いからだと思えます。原理の認識が薄れ、ロータリーの基本は精神的価値だということを忘れる傾向にあるからであります。

今一つは、その確立された制度の中でのロータリアン教育の問題です。若干の例外を除いて、クラブ自体がロータリアンを教育するという機能がほとんど果たされていないように思えます。昔キップリングという作家が書いた動物小説の中で『群の力は狼である。そして、狼の力は群である』と言うのがありました。つまり一匹一匹の力が強いことは群の力を強くして行く。ロータリアンもやはり一人一人が強くなければロータリー・クラブも強くなりません。ロータリアンの内なる心を強くする。それはロータリアンが只管心を磨くことであります。ロータリーの第一義は何か。心の開発、ロータリアンに奉仕の心を育てる、例会に参加するときは、大企業の経営者も、中小企業の経営者も、この精神世界では対等として考えて、この機会を利用して、自分以外のロータリアンを我が師と仰ぎ、只管自分の心を磨くのであります。世俗の論理を捨てて、均一平等の腹構えがなくてはなりません。

曾て戦前、ローマ法王が朝になってベッドの中でお亡くなりになっておりました。そして、最後になったベッドの枕辺には、一冊の書物が置かれていた。それは11世紀のイタリアの無名の修道僧が書いたカ

ソリック神学の論文であったと言う。これは一体何を意味するのかと申しますと、ローマ教会の僧職制度を見ますとき、法王になる人、司教、枢機卿になる人あり、末端の司祭になる人もあります。しかしそれはローマ教会が運動体として、人類社会の中で社会機能を果たさなければならない。其の機能の配分の問題であって、神の御前(みまえ)に仕えるとき、其の立場は上下の差別はないのでございます。ローマ法王といえども、11世紀の無名の修道僧が記した良質なカソリックの論文を師と仰ぎ、これに学ぶという姿勢を持っていたのでございます。国際ロータリー会長、ガバナーといえどもクラブ・ロータリアンの上になったものではありません。ロータリーの機能を果たす為、或る年度に委託されたものであります。

そして集会を出たら、其の磨かれた心を、個人的に実践する努力を致します。しかし人間は神様ではないから、過ちもあるかもしれない。そこで反省して、また一週間経ったら例会で心を磨く。これを繰り返しながら、人間の心の境地在、螺旋の状態をもって上って行く、これをsupairal theory螺旋説と申します。こうして自分の行動を規律する人達にあっては、ロータリーはその人の心の中に住み、心の支えとなるのであります。ロータリー運動が存続する限り、この基本構造はなくならないのであります。

近年(雪印食品、日本ハム、東京電力、日本信販など)日本を代表する企業が、倫理観の欠如による不祥事が続発し、企業への不信感が増しております。

日本の経済を支えているのは企業であり、その中心に位置するのは経営者であります。企業経営者は人間としての倫理観を確立し、それを守ろうとする生真面目な社会を作ることが、企業統治の危機を脱するための最善の道と存じます。倫理を忘れた職業人は国を滅ぼすこともあります。従って21世紀のロータリアンの進むべき道は、心を磨き職業奉仕に徹することです。

そしてクラブを構成しているメンバーは、一会員制で与えられた良質な人でなければ成らないというのが大前提であります。『ロータリーに入っても儲からないからやめた』と言う人で、構成するものではありません。ロータリー・クラブが自らの自治権を確立し、自由なロータリーを実践すること、そして豊かなクラブライフを育てて行くこ

とが、21世紀のロータリーの繁栄を取り戻す為の基本前提であろうかと思えます。

5. 奉仕の実践 (奉仕の心)

日本のロータリーは昭和3年(1928年)7月に地区が設定されまして、地区管理の時代に入ります。第六代目のガバナーに大阪ロータリー・クラブの会員で、里見順吉と言う方がおられました。大丸デパートの社長さんで、職業奉仕を提唱されました。大丸の社是に『先義後利』と言う言葉があります(正しい商いをしておれば、儲けよう儲けようと考えなくとも、儲けは後から自然についてくる)。これを作ったのは下村彦右衛門と言う方で、これを旗印に今日の大丸の基礎を作ったと言われております。

大阪には、こういう一つの商業道德を作る下地がありまして、また水の都ですから八百八(ヤ)橋と言いまして、沢山の橋が架かっている。此の中で国家権力によって、国の予算で架けられた橋は殆ど無い。全部大阪商人が、自分達の地域社会は自分達で作って行くんだという事で、彼らの財力によって橋は架けられました。従って渡辺橋、米谷橋、高麗橋、肥後出身の方たちが作った肥後橋等皆個人の名前が付いております。此の中で、人の名前の付いていない橋、心齋橋と言うのが御座います。これは江戸の中期、儒者中井菴庵が、享保9年に大阪尼崎に『懐徳堂』と言う学校を造りました。大阪商人は毎日仕事が済んだ後に此処に通って、儒学・朱子学を勉強しました。最初の学生、つまり校長である三宅石庵は、孔子が老子荘子に言ったという『仁の道』は貧富(ひんふう)に関係なく存在する。他人の苦しみを共感し、花が美しいとか、秋風が身に染むと言う《物のあわれを知る、これが仁なり》と教え、先ず心を洗って来いと説いたのだそうです。そのことに感銘を受けた大阪商人が、心を洗う、心を磨く、心を清める。『心を清める橋』と言うことで心齋橋と言う名前を付けました。今は男女の逢い引きの場所の様ですが、名前の由来を訪ねると、昔の人は真面目に勉強した結果心を清める橋として『心齋橋』と名付けたと言うのであります。なぜこんな話を紹介したかという、大阪商人が毎晩『懐徳堂』で勉強して、その心を磨いた結果、ロータリー・クラブの中で奉仕の心を磨くと同じように、その実践として社会奉仕的な仕事として、地域社会に橋を架ける。そ

れから職業奉仕的な現れとしましては、そこで学んだ論語が、大阪商人の職業道德の背景に流れて居ると言わなければなりません。それが『先義後利』を初めとして、大阪商人の商業道德の基本になって居るのでございます。ロータリー・クラブは毎週1回、クラブの中で心を磨くことによって、ロータリアンが一步外へ出たときに、大阪商人が地域社会に対する奉仕として橋を架けたと同様に、様々な社会の要請について奉仕の心をもって社会に役だつてゆく。そして倫理を、商業道德を提唱してゆく。そういう形で実践して行くことが出来るだろうと思えます。

1962年、インドのカルカッタロータリー・クラブから出たニッティシC・ラハリ国際ロータリー会長は『世界中の何処かの片隅に一人でも不幸な人がいる限り、我々ロータリアンは永遠に幸せになることが出来ない』と述べ、『心の中に火を燃やせ、Kindle the Spark Within』というターゲットを打ち上げました。幸せの条件を世界中の全ての人達との関係で捉えたもので、非常に東洋的な神秘的なターゲットであります。これは地域社会の延長線上に、世界中の全ての人達の幸せを祈るものでなければなりません。ロータリアンは何らかの形で世界の動きに関心を持ち、それらの一つ一つが、ロータリアンの直接関心を持つ課題なのだと思えて、国際ロータリーの提唱した計画に関心を持って、自らの判断で参加することが、ロータリー運動再興の為の路であるように考えます。

一国の国民の幸せの実現に忠誠を誓う良質な職業人の思想を、我々はロータリーとは呼ばない。それならロータリーはどこにあるか。国、伝統、言語、思考方法も違う。だけど地球上のすべての人達の、一人一人の幸せの実現に忠誠を誓いたるものを、我々はロータリーと呼ぶのであります。

6. 結び

これからのロータリーについて短い時間ですがお話しさせて戴きましたが、私たちは何時かはこの世を去らなくてはなりません。良い死を迎える為には、充実した生、満足した生を送る事でありましょう。それは自分の為よりも、人の為にした事に満足感が多いようであります。

黒沢明監督の映画『生きる』の主人公は、胃癌で余命が長くないと知ったとき、最後の奉仕を考えま

した。公務員である主人公は、子供の為に児童公園の建設を計画し、完成すると其の公園のブランコに揺られながら、『短命し、恋せよ乙女……』と口ずさみながら、満足して死を迎えました。自分の人生を振り返り満足するのは、決して金や物ではない。他人の為に尽くした事にある。『情けは人の為ならず』与えた幸せを通して、自らも幸せを得る。奉仕は所詮は、自分の為のものでもある様です。

或る先人が『ロータリーは人生を如何に生きるかを学ぶところだよ』と申されました。どうぞ皆様もその様なお気持ちで、クラブライフをお楽しみ戴けたらと存じますが如何でしょうか。

ご静聴感謝致します。